

奥多摩巡検

森本 泉

7月19日、私達の巡検は羽村から始まった。駅のすぐ近くに、まいまいず井戸がある。透水性の良い関東ローム層や段丘礫層に覆われた武蔵野台地では、地下水面は地下10~25mと深い。当時の土木技術ではそこまで垂直に掘れなかったので、蝸牛の貝殻のように螺旋状に掘り下げてから井戸を掘ったのである。

太陽が容赦なく照りつける道を羽村取水堰へ向かう。途中で段丘岸を下ったが、崖線には緑地が带状に残されていた。堰からは多摩川の水を玉川上水へ導き、現在はさらに狭山湖へ送っている。緩い勾配で台地上の尾根筋へ水を引いた、技術水準の高さに驚く。東京の上水道配水システムの説明を見て、玉川兄弟の銅像の前で昼食をとる。

午後は電車で奥多摩へ向い、奥多摩ビジターセンターを見学する。案内の女性の厚意で、ビデオも放映してもらった。さらにバスで小河内ダムへ向かう。昭和32年に完成したこのダムは、水道用としては世界有数の規模を持ち、東京西部と山梨県に給水している。堤体上からはるか下方の基底部を見ると、吸い込まれそうで怖かった。

ダムのそばに奥多摩郷土資料館があり、水没した小河内村をしのぶ資料が展示されていた。山村らしく、製材や製炭の展示があり、コンニャクや雑穀の標本、蚕糸繰り器具などもあった。郷土芸能も発達しており、都の無形民俗文化財に指定されている。展示品という形で文化は残されているが、村の歴史は止められていた。何とも言えない複雑な心境となる。

再びバスに乗り、奥多摩湖畔の民宿へ。夜のミーティングで、次の日に回るポイントについて担当者が説明し、それに杉谷先生が説明を加えて下さった。

20日——バスで山梨県の丹波へ行く。付近を流れる丹波川の河床礫は、拳大以上のものが目につき、角がなく白っぽい。ハンマーで叩き割ると、白っぽいのは表面の風化層だけで、中は黒かった。洪水時に礫同士が衝突すると、この風化層が壊れ

ていくそう。手分けして礫径を計り、河岸の露頭でクリノメーターで地層の走向・傾斜を計る。実際にやってみると難しいもので、なかなかうまくできなかった。

午後、日射がますますきつくなる中を、丹波川に沿って進む。河岸段丘があったので断面をみると、基盤岩を旧河床の礫層が薄く覆っていた。岩石段丘という説明であった。段丘面の比高を、ハンドレベルを使って二人一組で測定する。これは簡単な器具だったせいか、割合使い易かった。比高はおよそ13mであった。

今度は、川を離れて自然遊歩道で植生を観察し、土壌サンプルを採取する。標高はちょうど照葉樹のヤブツバキクラス域の上限にあたり、より上部は落葉樹で占められているという。アカマツの植林も散見し、エノキダケや椎茸の栽培場も見られた。最近キノコ栽培が盛んになってきたそうで、夕食のマイタケの天ぷらは絶品だった。山腹斜面には急傾斜の畑が切り開かれ、土砂崩れ防止のための擁壁や、溪流の砂防ダムが目についた。夜のミーティングでは、土色帳でサンプルを観察し、昨夜同様、次の日の説明が行われた。

21日——バスに揺られること、およそ2時間半、やっとの思いで日原鍾乳洞に着く。裂目のような入口を入ると、別世界である。この付近の石灰岩は小規模に分布するので、内部は狭くて迷路のようだ。暗闇の中に鍾乳石がぶら下がり、石筍が立っている。“世紀の断層”（断層鏡肌）を目にして、地球の時空的スケールに驚嘆した。奥多摩駅に帰るバスからは、石灰石の採掘現場も見られた。最後のポイント、氷川では、化石サンゴ礁があるというので、黙々とハンマーで石を割った。化石は標本のようにきれいなものではなく、先生に指摘されてやっとそれと識別できた。

酷暑の中、うだる私達に杉谷先生は相当手を焼かれたことだろう。21日の夕方、全員無事に奥多摩を後にしたのであった。

(7月19~21日杉谷教官指導)